

平成 28 年度 国立大雪青少年交流の家開所 50 周年記念事業  
「体験の風をおこそう・全道フォーラム」事業報告書

1 事業実施の背景

本事業は、交流の家開所 50 周年記念事業の一つとして計画された。

交流の家が事務局となり、北海道教育委員会、道内の青少年教育施設と連携し、北海道の子供たちに豊かな体験の機会を提供し、「体験の風をおこそう」運動の機運を高めることを主な目的として、同交流の家を会場に、「体験の風をおこそう・全道フォーラム」を開催した。

事業企画は、国立大雪青少年交流の家、国立日高青少年自然の家、北海道立青少年体験活動支援施設（ネイパル）6 施設の職員で企画委員会を組織し、実施したものである。

また、事業コンセプトとして、①困難を克服する体験。一段ハードルを上げた体験を提供、②北海道の青少年教育施設が総ぐるみで、子供たちに良い体験を提供、③寒いからこそ外での活動を通して体力の向上のきっかけづくり、④新しい友達との出会いの機会作り、をコンセプトに事業企画を行った。

2 事業趣旨

50 周年記念行事の一環として、国立大雪青少年交流の家が事務局となり、道内の青少年教育施設と連携して、北海道の子供たちに豊かな体験の機会を提供する運動を展開する。

この運動を一層発展させるために、北海道教育委員会などと連携した事業を開催し、「体験の風をおこそう」運動に対する北海道内の機運を高める。

3-1 主催 独立行政法人国立青少年教育振興機構 国立大雪青少年交流の家

3-2 共催 北海道教育委員会、北海道青少年教育施設協議会、北海道「体験の風をおこそう」運動推進協議会

3-3 協力

国立日高青少年自然の家、北海道立青少年体験活動支援施設ネイパル深川、北海道立青少年体験活動支援施設ネイパル砂川、北海道立青少年体験活動支援施設ネイパル森、北海道立青少年体験活動支援施設ネイパル北見、北海道立青少年体験活動支援施設ネイパル厚岸、北海道立青少年体験活動支援施設ネイパル足寄

4 後援 北海道、北海道教育委員会、北海道小学校長会、北海道中学校長会、北海道高等学校長協会、上川管内教育委員会連合会、美瑛町、美瑛町教育委員会

5 事業概要

- ・期日 平成 28 年 11 月 5 日（土）～6 日（日）（1 泊 2 日）
- ・会場 国立大雪青少年交流の家
- ・対象・募集人員 小学校 3～6 年生 150 名  
\*講演のみ 一般・参加者の保護者 等（定員無）
- ・講師 特別講演講師  
名寄市役所スポーツ振興アドバイザー 阿部 雅司 氏

6 目的の達成指標（アウトプット）

- （1）参加者の満足度
- （2）スタッフによる、参加者の変容のみとり数（具体的なエピソード数）

## 7 広報

全道の児童を参加対象としたことから、全道の小学校に対しチラシを学校経由で配付し広報を行った。予算の都合もあったが、上川管内の対象児童（小学校3年生～6年生）には学校経由で全児童にチラシを配付（約1万6千部）、上川管内以外の学校（約1,000校）には各1部のチラシ配付とした。

この他、交流の家ホームページ及びフェイスブックでの広報、協力施設でのチラシ配布により広報を行った。

○広報開始の時期が遅くなってしまったことから、参加者定員の充足が心配されたが、結果として募集定員を充足する153名の参加申し込みがあった。

## 8 参加者人員・類型

参加者 142名（定員比94.7%）

内訳：学年別 3年生55名、4年生48名、5年生24名、6年生15名

性別 男子69名、女子73名

地域別 旭川市61名、富良野市19名、美瑛町10名、名寄市9名、  
上富良野町8名、東神楽町6名、当麻町5名、上川町4名、  
南富良野町4名、鷹栖町3名、中富良野町3名、美深町3名、  
士別市3名、東川町2名、下川町1名、比布町1名

○申込者は定員の150名を超える152名の申し込みがあったが、その後体調不良などによるキャンセルがあり、最終参加者は定員に達しなかった。

○参加者は3年生、4年生の中学年が多く、同学年におけるニーズが高いことがうかがえる。

○上川管内市町村の対象児童全てに配布したことから、参加者は上川管内に集中し、上川管内以外の参加者がなく、今後の事業広報の在り方に検討を要する。

○募集人員に対し90%を超える参加申し込みがあったことの要因として、一部の保護者への実際の聞き取りでは、体験活動の効果に対する保護者の期待が高いことがうかがえた。また、これまで同様の事業には参加の意思を示したことがない児童が、今回のチラシを見て参加を希望したとの声も受けており、チラシの効果が高かったことが考えられる。

## 9 事業日程・内容

### (1) 日程

		1030	1100	1200	1230	1330	1400	1630	1830	1900	2000	2200
11/5 (土)		受付 開講式	講演	仲間 づくり ①	昼 食	仲間 づくり ②	選択活動	野外炊事活動	片 付	キャンプファイヤー		自 由 浴 時 間
7:15 7:30 9:00				1200	1300	14:30 15:00						
11/6 (日)	つ ど い 朝 食	選択活動			昼 食	選択活動		閉 講 式	解 散			

### (2) 概要・運営のポイント

○参加者の体験活動の経験値の差などによるニーズの違いがあると想定し、「選択プログラム」を3コース設定、子供たちの経験値に応じた選択を可能とすること。

○各プログラムは、コンセプトである「困難を克服する、一段ハードルを上げた体験」、

「寒いからこそ外での活動を通して体力の向上のきっかけづくり」を実現するため、屋外での活動を中心とすること。

- 事前に選択した3コースのプログラム別に班を組んだが、活動班と生活班が繋がるよう、同一活動班の参加者が同じ宿泊棟になるように部屋割りを組むことで、1泊2日の短期間でもより良い友人関係が築けるようにする。
- 全体統括、共通プログラム運営、生活支援担当を交流の家職員、選択プログラム運営担当を協力施設職員がそれぞれ担うことで効果的な事業運営となるよう組織する。
- 各青少年教育施設の職員による企画委員会を組織し、協力しアイデアを出し合うことでプログラムの企画立案を行ったが、各施設の体験活動のスキルやノウハウの交流、参加職員の意識の向上及びスキルアップにつなげ、それぞれの施設の事業運営に還元できるようにする。
- 「新しい公共」型の施設運営の観点からも、様々な主体の協力を得た事業運営とするため、事業支援に法人ボランティア、体験活動推進員、NEALリーダー等が参画することで、相互の情報交流、体験活動の支援を今後各フィールドで展開していく上での意識付けやスキルアップの機会を提供する。  
(NEALリーダーについては、インストラクターにステップアップするための演習として位置付けた。)



### (3) プログラム展開概要

開催に先立ち阿部所長からは、「雪の中、寒さに負けず思いっきり体を動かして楽しんでください。そして、同じ学校の友達だけでなく、ひとりでもたくさんの人たちとお話をして、違う学校の友達をつくってほしい」と激励の言葉を送った。また、「体験の風をおこそう応援団」のガチャピン・ムックが登場し、参加者へのメッセージをいただいた。



開会式に続いて、リレハンメルオリンピックノルディック複合団体競技で金ダルを獲得し、現在、名寄市スポーツ振興アドバイザーの阿部雅司氏から「金メダルへの道のり～つらいときこそ笑顔で！～」と題して講演があり、同氏が競技を始めたきっかけ、両親や先生、友達や家族の支え、挫折を乗り越えて金メダルを獲得するまでの話があり、「夢は言葉に出すことで実現につながる。失敗してもいいから何事にもチャレンジしてほしい」と語りかけた。

その後、初めて出会う参加者同士の緊張を解きほぐすため、「仲間づくり活動」を行った。次に、コースごとの活動を行い、事前に選択していた3コースに約50名ずつが分かれ、降り積もった雪の中、野外中心の活動を体験した。コースごとの活動は、Aコース「トレジャーハンティング～大雪の秘宝を探せ～コース」、Bコース「登山(スタミナ懐石)コース」、Cコース「森の生活コース」として各企画委員の指導による活動を展開、また、3コース共通のプログラムである「炊事活動」、「キャンドルの集い」なども行い、2日間にわたり、「寒い冬だからこそ、体を動かして外で思いっきり活動する」としたコンセプトに基づき、様々な活動を体験した。

(活動の様子)

● Aコース ウォークラリー



● Cコース 秘密基地作り



● Bコース 望岳台まで雪上登山



● 体験の風応援団ガチャピン・ムックの登場！



● 共通プログラム 炊事活動



● 共通プログラム キャンドルの集い



事業を終えた参加児童からは、「疲れたけどいろんなことを体験できて楽しかった」「最初は知らない人ばかりいたけど、二日のあいだに友達が増えて良かった」などといった声が聞かれ、参加者の今後の体験活動への意欲がうかがえた。

## 9 各プログラムごとの企画のねらい・展開等

### (1) 共通プログラム

#### ① 講演

講演の人材選考は、まずは北海道にゆかりがあり、スポーツ選手で成功を収めた方、少年期の体験を通して夢を実現するまでの過程について講演いただける方として選考し、現在、名寄市でスポーツ振興アドバイザーを務められているリレハンメルオリンピックノルディック複合団体金メダルの阿部雅司氏に依頼した。

同氏とは2回の直接打ち合わせを通じて、子供たちに体験活動の重要性と困難を乗り越えること、夢を持ち続ける大事さについて話をいただき、講演に続くプログラムへの動機付けにつながるよう依頼を行った。

当日はリレハンメルオリンピックを知らない世代の参加者であり、またクロスカントリー経験者も少ない中ではあったが、講師の挫折を乗り越えた経験、「夢は言葉に出すことで実現につながる。失敗してもいいから何事にもチャレンジしてほしい」との問いかけに対し、参加者は今回のキャンプでの経験と合わせ、日常生活の中での体験への自信に繋がっていくものと思われる。

#### ② 仲間作り

講演に続き、ここで初めて出会った参加者緊張をほぐし、1泊2日の短い期間である体験活動においても早期に打ち解け班活動でのプログラム参加に入っていけるよう導入として大事なプログラムであった。

時間設定として、昼食をはさみ1時間となったため、昼食時間も有効に使って班のアイスブレイクに繋がられるよう、昼食の前後でアクティビティの区分けし、前半を全体で行うもの、昼食後は班としてのアクティビティとして設定した。

体を動かすアクティビティでもあり、体と心の緊張はほぐれたと思われるが、時間設定が昼食を挟んだこともあり、短く感じ十分な時間が確保できなかったと感じたスタッフも多かったと思われる。

#### ② 野外炊事

当初、屋外での活動を想定し、駐車場内に降雪時にも活動できるようテントを設営し、本館1階の駐車場スペースと合わせて100名の活動場所は確保した。

メニューとしては、水場が少ないことや次のプログラムであるキャンプアイヤーへの接続時間も考慮し、洗い物の少ない焼き物をメインに、寒い中でもみんなで協力し温かいものを食することの感謝と達成感を感じてもらうようにプログラム設定を行った。しかし、前日の天気予報により低温（マイナス8度）となることが予想されたことや、前日までに想定以上の雪が降り、会場設定した場所の屋根からの落雪等を考慮し、屋内での炊事に切り替えた（結果としては、当日は日中の活動で天候は一転、雨となり、参加者のウェアが濡れてしまったため、夜間の屋外活動は実施できない状況となった）。

屋内炊事活動時には、班ごとに役割を分担し、みんなで協力して活動することを意識づけるように展開し、班ごとに協力して活動を進める姿が見られた。

屋外での活動を楽しみにきている参加者もいたため、屋内での活動に切りかえたことの説明が十分であったかどうか。「寒い中でも屋外での活動、寒さを乗り越える」ことをコンセプトともしていたため、実施できなかったことは残念ではあったが、安全管理上、中止判断は致し方ないものであった。

#### ③ キャンプファイヤー

野外炊事と同じく、キャンプファイヤーも今回のキャンプで楽しみにしている参加者も多い活動であったが、安全管理上の判断により屋内でのキャンドルの集いに切り替えて実施した。

室内での活動でも思い出に残る演出を心がけ、中央に大型の燭台を配置し、幻想

的な場作りを行った。

点火の式も厳かに行い、その後は雰囲気切り替え楽しいゲームで場を和やかな雰囲気に展開、クロージングは日を見つめてのそれぞれの1日の活動を振り返り、2日目の活動への期待につなげられるようにした。

総勢160名での活動展開でも体育館は狭く感じ、センターの燭台での事故に注意し、その場の判断で監視スタッフを配置したことは良かった。また、万が一への備えとして、消火器などを近くに配置しておく必要があったと思われる。

## (2) 選択プログラム

### ① Aコース

屋外フィールドを広く使い、身体的負荷を少なく抑え、かつ探求心を高めることができるよう意識して、プログラムを組み立てた。

初日は、大雪既存のウォークラリーを活用し、グループでの野外活動を実際に体験できるようにした。経験済みの参加者がいても支障のないように、数ヶ所のチェックポイントではスタッフとの対人ゲームを行い、その成績によってポイントを獲得できるようにアレンジした。このスタッフを、参加者が迷いやすい分岐点に配置することで、慣れないコマ図によるコース外れを防ぐことも意図した。

2日目のトレジャーハンティングは、宝探しの高揚感が高まるように、参加者が暗号を解いて目的地を割り出す形式とした。目的地では、常駐スタッフからの指示に従いグループチャレンジに取り組み、その成績によって報酬が決まるというシステムで、その後はまた新しい地図をもらって次の目的地を割り出すというふうにつなげた。

どの班も最後まで熱心に取り組み、また、班つきボランティアの巧みな誘導によって参加者内での役割分担が自然発生的になされ、どの参加者も班への帰属感を高め、主体的かつ協調的に活動を楽しむことができた。

### ② Bコース

「困難を克服する体験」「寒いからこそ外での活動を通して体力の向上のきっかけを作る」の2つのコンセプトを具現化するプログラムとして組み立てた。

初日は、プログラムの構成にあたり、全員で協力することで、交流を深めるとともに、小さな達成感を積み重ねていけるよう配慮した。まず「館内ウォークラリー」と「ビニール袋ソリの作成」を実施し、楽しみながらお互いの顔と名前を覚えることができる時間とした。次に、キックゴルフを1ホール終えるごとに与えられる課題を班全員でクリアしていく「キックラリー」を実施した。参加者は、輪になった状態での連続ジャンプや、なぞなぞ等の課題に取り組み、参加者同士で交流を深めることができた。

2日目の「登山」は、最後までやりきることでより大きな達成感を得られるよう意図した。出発にあたり、まずは参加者に対し登山中に体を冷やさないようアドバイス。その後、登山開始地点までバスで移動してから、望岳台を目指して登山を開始。参加者とボランティアは、荷物を背負い、雪道の斜面を歩きながら、途中でお互いの体調を確認したり、励ましの声を掛け合ったりして、約80cmの積雪の中を歩き、約2時間で全員がゴールすることができた。参加者からは、「雪の中を歩くのは大変だったけど、みんなで助け合えたから嬉しい」等の声が聞かれ、参加者は大きな達成感を感じていたようであった。

### ③ Cコース

北海道の冬の自然に直接触れることで雄大さ、厳しさを感じさせることを意識してプログラムを構成した。

1日目は、自然の中を徒歩で歩き、木の実や葉、草、動物の痕跡を探す『ネイ

チャービンゴ』に挑戦した。普段、何気なく見ている木の葉にも様々な色や形があり、動物の足跡も様々な形があることを再発見することができた。また、班毎にビンゴに挑戦することで参加者間の交流を深めることができた。さらに活動中は、低体温を防ぐために、館内に入る時間を要所で設定し体が冷えないよう工夫した。

木の枝スプーン作りでは、木を加工することで道具として利用できることを学び、秘密基地作りの相談タイムでは、翌日に使用する道具や場所を事前に見せた上で話し合ったことにより、基地作りや装飾の具体的なイメージを作ることができ、また、参加者間の交流にも繋がった。

2日目は現地に基地の見本を作成しておくことで、目標を明確に示すことができた。参加者は前日に相談した内容を思い出しながら意見を出し合い雪の降りしきる中、理想の秘密基地を建てるため作業に寒さも忘れ作業に没頭していたのが印象的だった。

昼食はカートンドッグ作りに挑戦した。各班から数名調理担当とし、パンに材料を挟める作業を行ったが、自分の分を含め仲間の分を作ることで責任感を持たせ、より積極的に活動に取り組むことを意識させることができた。また、昼食は秘密基地でとり、前日に作成した木の枝スプーンを使用し食したことにより大自然の中での生活体験を十分に満喫した2日間となった。

## 10 参加者アンケートから

### (1) 総合的満足度

・満足	123	86.6%
・やや満足	16	11.3%
・やや不満	2	1.4%
・不満	1	0.7%

### (2) プログラム

・満足	124	87.3%
・やや満足	17	12.0%
・やや不満	1	0.7%

### (3) 事業運営

・満足	118	83.1%
・やや満足	20	14.1%
・やや不満	4	2.8%

### (4) 職員の対応

・満足	116	81.7%
・やや満足	25	17.6%
・やや不満	1	0.7%

### (5) また参加したいか。

・したい	135	94.4%
・したくない	5	3.5%
・どちらでもない	3	2.1%



## 1 1 参加者の変容 –スタッフのみとりから–

### 1. 事業をとおして感じられた、子供たちの変化（成果と課題）について

- 相手の名前を呼ぶのさえためらっていた子が、違う小学校出身の同じグループの子に「一緒に部屋がいいね！」等の言葉をかけていた。
- 初めはCコースの活動に「他のコースが良かった」と不満を言っている子が、ネイチャービンゴでは初めて雪を見た子供のようにはしゃぎ、ビンゴを楽しむとともに雪でも体を使って楽しんでた。
- 学年による態度の違い、また、成長の変容の在り方の違い。  
(中学年：こだわりやプライドがあり、待つことや集団行動を共にするのが大変な時があった。)  
(高学年：最初は控えめであるが、自分の班での役割に気づき、手助けをしてくれる。)
- ゲームや遊びを通して、親しみを深めていく様子。(手遊び、言葉遊びなど、強制的に参加させるものではなく自発的に行った遊びで距離が縮まっていく。)
- 子供同士で認め合い、活動を高め合っていく。  
(一人がお替わりにいく→みんないく。イラストを描く→真似して描く等)
- 2日目の秘密基地づくりでは、1日目の様子とは違い、うまく完成できていた。
- 子供たちには大なり小なり変化が見られていたように感じた。
- 秘密基地づくりの相談の時に、真剣にみんなまっすぐ取り組んでいた。
- 初めはほかの班の友だちの方によく行きがちだった子が、1日目を終わると班のみんなのところと同じ班の子と一緒にいることが多く見られたので良かった。
- 「新しい友達できましたかー？」というキャンドルの集いの時の呼びかけに、口をそろえて、肩を組んで「できましたー！」と言えました！
- 少しずつ班の中で子供たち同士が繋がっていた。1日目は、私が間に入って繋げていたが、2日目以降役割を与えることで子供同士が繋がっていた。
- 話し合いができなくて、体を使ってけんかしていたけれど、2日目はみんなで話し合って決めていた。
- 子供たちのそれぞれの性格を見て、役割を与えることでグループ内で協力するようになった。
- 積極的な子が率先して消極的な子を引っ張ってくれた。
- 期待と不安の1日目でしたが、2日目は各コースとも積極的な行動が見られたと思います。
- Bコースに帯同しましたが、班ごとの助け合いや工夫が見られて良かったと思います。
- 初日の緊張感が各グループの活動に入ってからウキウキ感に変わっているのが見られた。  
グループリーダーのリードが良かったのか。
- 6年生の子がリーダー役を自然に担ってくれていた。おかげで支援の必要な子への対応を手厚くできた。  
子供も、子供同士のほうがスムーズに話を聞けることも多く、集団活動の良さを感じました。
- 初対面の子たちが短期間で打ち解け、協力し合う姿が見られて良かった。学校で過ごすかのような軽口やじゃれあいを受け入れ合っていたと思う。
- どんなことにも挑戦していく気持ちが高まっていた。
- 仲間と過ごすことで徐々に打ち解け、緊張していた空気が緩和された。
- 初めは自分たちで「いただきます」が言えなかったのに、言えるようになった。
- 男子のRくんが女子のコーンを運んであげたり、いすを用意してあげたりしていた。
- 指示をしたらほかの班のいすも片づけてあげていた。
- 最初は緊張した様子だったが、6人で協力していく姿に感動した。
- 表情が豊かになっていくのがわかった。
- 仲良くなっていた。



- 自己中心的な行動だったのが、メンバーを気遣うような様子が見られた。
- 1日目はグループ内で男女に分かれていたが、2日目のトレジャーハンティングでの地図を一緒に見たり、行動を共にすることで男女関係なく打ち解け始めた。
- 「今すべきこと」と「やりたいこと」の区別ができるようになってきた。
- 話をしている人に体を向け、静かに話を聞くことができるようになった。
- 子供同士が仲良くなる様子が見られた。
- 1日目より2日目のほうが他人に配慮する様子が見られた。
- 「冬ならではの体験」をコンセプトに、集まった子供たちは意欲が高く、最後の登山もくじけそうになった子がいたらみんなで励まし合って、リタイアする子がゼロで終わることができて良かったと思います。特に、前日まであまり仲が良いグループではないところが2日目は上級生が下級生を気にかける場面が多く見られた。
- 子供たちの発言が、事業が始まった当初は「イヤダー」「無理」「やって」などのマイナス発言が多かったのが、2日目に入ると「もう少し頑張る」「やってみる」などのプラスの発言が増えていった。終わるころになると「自分でやって良かった」「あの時頑張って良かった」と言っていたのが非常に印象的でした。
- 最初は心を閉ざしちゃっておとなしかった子も、楽しく話せるお友達ができていた。
- 秘密基地づくりの相談の時には自分の意見を相手に伝え、相手の意見もしっかり聞くことができていた。
- 後半になるにつれて笑顔が増えた。
- 相手の名前を覚え、呼ぶ努力をしていた。
- 班で協力しようと発言の少ない子には声を掛け合っていた。
- 自分のああしたいこうしたいという思いが強い子（小3）がいて、初めは自分のペースで先頭を歩いていました。体験の中でグループの中に入り、自分の意見が通らなかったり、人の意見にも気づくことができたのか、2日目外での活動では私の声を聞いてペースを落としたり、友達を待つことができるようになりました。
- 自分が何をしたいのかかわからず、受け身になっていた子（小6男）がいましたが、2日目に「皆を待たせて」などをお願いをしていくうちに自分から「今集まる、皆集まって」と私に聞いたり、皆をまとめてくれました。
- 女子（5年生）が3年生の年下の女子を気にかけてくれて2日目には手を引いて「こっちだよ」と教えていたり、歩く時のペースを考え一緒に歩いてくれたりと、優しい場面が見られました。
- はじめてのお友達ばかりで、最初は緊張して友だちに話しかけられずにいましたが、1日活動し、話せるお友達を見つけ、2日目には緊張も少しほぐれ、活動中も意見を出し合うことができました。（友達の話を聞くほうはもう少しですけど）
- 1人で行動しがちで周りとの関わり合おうとしなかった子が、周りの援助（言葉がけなど）によって交流を深めることができた。
- 話し合いの場やグループでの活動が多かったため、他学年とうまく話し合いを進めることもできて、自分の役割に責任を持つということを理解している子が多かったと思う。
- アイスブレイクのような活動があると、最初の段階から班全体で一体となれた。
- 私をはじめ、大学生の中ではボラ（グループリーダー）をいじる様子が見られた。きっと言われている方はある程度免疫があるので大丈夫だと思うが、普段あまりこのような光景を見ない児童には少し居づらくなるなってしまったのではないかと心配になった。
- 班行動で仲良くなっても、自由時間になったとたんに同じ学校の友だちと一緒にしようとする。
- 1日目の相談（秘密基地づくり）で、全員が意見を出し合うとはいかなかった。（落書きに夢中になったり、話が盛り上がりたり。）
- ペグなどの用具の使い方の説明はしたほうが良かった。
- 雪玉づくりや落書きなど、夢中になってしまうと何度注意しても止まらない。

- 時間について集団行動の意識をあまりもてなかった。
- 他の人が何をしていた、自分は何をすべきなのか考えることが少々苦手。
- もう少し子供たちにグループリーダーは目的をしっかりと伝えて達成感を味わってほしかった。  
(少人数で多数のグループは良かった。リーダー研修時にそのことをしっかりと伝えて！)
- 挨拶やありがとうが言えない子がとっても多いと思った。廊下での挨拶等をもっとリーダーが率先してお手本を見せられたら良かったと思います。
- 登山の昼食後の片づけをリーダーが一人でやっている班が2班くらいあったので、子供たちにしっかりと最後までやらせるように注意しました。(子供たちは雪で遊んでいた。)来た時よりも美しくが守れていない子がとても多いと感じた。(リーダーに徹底を！)
- 個別に支援の必要な子への子供たち同士の理解が難しいなあと感じた。
- 責任感があまり感じられなかった。
- 自分からリーダーになって周りの子を引っ張ろうという気持ちが足りない。
- 自分のことしかやれない。
- 周りを考えない行動も見られた。
- 班行動やリーダーになれてきて、打ち解けたのは良かったが、危ないから止めるようにと注意したことを続けていた。注意の仕方を考えたいと思う。(今回は最終的に大声で怒ってしまったので。)
- 1泊2日では班員同士の交流が浅くなってしまったと思った。2泊3日であればより深い交流ができると思った。
- 全体でのアイスブレイクとは別に、班員の名前を覚える時間もあったほうが良いと思った。テープで名前を付けていても名前で呼んでいる子があまりいなかった・・・。
- 環境に慣れてきたときに、動きがマイペースになった。(移動・集合)初日は体力の差から自分のペースで進んでしまい、何度も注意しましたが、2日目のウォークラリーの時から、最高学年の子を中心にみんなを待ってそろってから移動するようになっていました。  
また、リーダーシップを発揮する子、後片づけを率先してやる子がいたお陰で、7人の班が。うまくまとまることができました。3年生の子はまだまだ食事や準備に伊時間がかかり、時間通りにはいかなかったり、自分の思い通りにならず、上級生がイライラしている場面もありましたが、声をかけて3年生の手伝い、サポートをしてもらうようにしていました。だんだん自発的にサポートするようになって良かったです。ただ、早く終わらせるために上級生が全部やってあげてしまっていた部分もありました・・・。

2. その他、ご意見やお気づきの点があれば、自由に書いてください。

- 何度もミーティングをしていただき、安心して事業に参加できた。
- グループ毎自由に活動させていただいて、子供たちに対する自分の振る舞いなどを反省する良い機会となりました。
- 活動の内容が子供たちのレベルに丁度あっていて疲れながらも楽しく活動できた。
- 悪天候などで活動に変更があった時もスタッフの方々が丁寧に対応してくれた。
- ボランティアスタッフは斜め掛けバックが必須アイテムなのだったと思った。プリントやらタオルやらペンやら、そのバックがあったほうが便利でした。
- 館内は使いやすく、とても良い施設に感じた。
- ボラ、スタッフ、班をまたいで臨機応変に協力できたのでとても助かりました。
- 外でも楽しく遊んでいて良かったと思う。
- 他施設職員、ボランティアと一緒に企画運営したこと、多様な意見を聞くことができ、大変有意義でした。
- 宿泊棟は個室でよかったと思う。
- 登山の職員はすごくいい方でした。(大雪の)

○あまり体験することができない「雪山」での活動は、子供たちにとって非常に良い体験であったと事業を終了して強く思いました。今後もぜひ、日本の未来を背負う子供たちに「体験の風」をおこせたらと思いました。3日間ありがとうございました。

- 1泊2日の事業だが、単なるグループ分けになってしまっているように感じた。もう少しグループワーク的な時間を作って知らない人と仲良くなるプログラムを用意してほしい。
- もしもの時を考えて途中から消火器の前で立っていましたが、キャンドルファイヤーでの安全管理が少し心配でした。（消火器の位置をスタッフで共有すべき。）
- 室内炊事の時の材料は班ごとに順番に取りに行かせたほうがよかったと思います。
- 替えの手袋や帰りの靴も持ち物に入れるといいと思います。
- 風呂場用の小さいタオルがない子が多いのが毎回ちょっと気になっています・・・。
- 子供たちを時間通りに誘導できず、集合に間に合わないことが多かったのが反省。
- 後片付けの事項が多いと感じた。
- たびうさぎが見たかった。
- 他の班の中にもリーダーを作ったほうが班がしまると思った。
- 人数が多い分、時間が色々難しかった。（炊事など）
- たびうさぎ、今回も見られなかったです。是非見たいです。
- やはり通常業務がある中で2泊3日となるとかなりきつい。
- コース別プログラムとはいえ、各施設職員の負担が大きい。
- ボラやスタッフにも布団の畳み方を教えてほしい。
- 子供へのアンケートの言葉が難しい。（運営など）
- 時間設定にもうちょっとゆとりを持ったほうが子供たちも適度に休むことができ、より良い活動になったと思う。
- 細かいことになるのですが、ボラの呼び方が一つに定まっているとわかりやすいなと思った。（ボランティア、グループリーダー、学生など少し混乱してしまう部分があった。）
- 少し移動に取っている時間が短いと思った。
- わかりやすいのですが、常にAコースが先だと他のコースの子で文句が出てしまうかなと思った。
- 些細なことではありますが、しおりの誤字は防げたらよかったかと思えます。
- 雨はともかく雪でも多少なりウェアや手袋が濡れるはずなので、そちらへの対策が欠けていました。（事前）
- 麦茶が少しぬるめのものがあつたらありがたかったです。熱くて飲めませんでした。

友だち同士で自分の話を聞いてくれない友だちに対し、「問題児」や「同じ4年生とは思えない」などきつい言葉をかけていることが何度かありました。私が言いたいことは言っても良いけど相手が傷つく言葉はやめると言うと、うなずきましたが、何も言いませんでした。班活動の中でもグループでの話し合い等、時間を取って相手の意見を聞いたり自分の意見を言ったりする機会をもっとつくることができたら、より仲間意識ができたのではないかと思います。私も反省は多くありましたが、良い経験となり、楽しく活動できました。ありがとうございました。

今日来ていた子の学校でいじめがあるといった子が2人いました。集団で悪口を言ったり、物をごみ箱に捨てるようなこともあったようです。実行するのはなかなか難しいですが、そういういじめの側の子にもこのような事業に参加してもらいたいなと思いました。新しい友達をつくることや協力して何かをすることの喜びを知って、相手の気持ちを考えることを覚えてほしいと思いました。

事前に情報がなく、特別な支援を必要とする子供の対応に最後まで悩みました。でも、一人職員さんがついてく

れる等の瞬時の対応して下さい、助かりました。ありがとうございました。

子供たちは頭と体を使って考えたり、体験したりすることで色々なことを学ぶことができたと思いますが、私自身もどのように動いたらよいか、どんな声をかけたらよいか、安全に班をまとめるにはどうしたらよいか、考えながら行動することができ、とても勉強になりました。また、他のボラや大雪のスタッフ、企画委員の皆さんからも学ぶことができました。良い経験ができました。ありがとうございました。運営者、支援者、ボラの皆さんお疲れさまでした。この規模になると予想外のアクシデントやハプニングがあって当然ですが、スムーズな運営がなされていたと思います。機会があればまた参加したいと思います。

## 1 2 事業の課題

### (1) 事業企画

北海道内の青少年教育施設職員により組織した企画委員による事業の企画・運営は各施設とも毎週のように事業を抱え、成果も求められる中で、協力をいただいた施設職員にとって企画・準備・運営とも負担が相当なものであったと感じる。

今後、施設間の連携による事業展開が、国・北海道の方針に基づき、求められてくるが、国・道の方針に沿ったより効果的な連携の形・あり方を今後模索していく必要があると思われる。

### (2) 事業運営

交流の家では、今回のような大規模キャンプ（スタッフ数、参加者数）の経験値があまりなかったため、スムーズな運営に苦慮し、スタッフに負担をかけてしまった部分が多かったように感じる。今後もより多くの北海道の青少年に対し、体験活動の機会を提供していく必要はあるが、参加者にとってより良い経験をしていただき、その経験が次の機会を求めて継続していけるような、プログラム企画・運営を行っていききたい。

## 1 3 事業の成果

### (1) 事業背景の達成度

- 参加者の声からは、「寒い中でも楽しかった」、「新しい友達ができてよかった」という声が多く、寒い環境の中での活動を新しい友達と協力して乗り越えた達成が感じられる声もあり、今回のコンセプトに沿った事業展開を行うことができた。
- 単独施設だけでは提供できない、協力施設がそれぞれのこれまでの経験値から企画した様々な体験活動を選択コースとして準備することで、参加者の選択肢を増やすことができ、各自の挑戦・目的を持った体験活動への参加の意欲と参加後の満足度に繋がったと考えられる。
- 本事業で、交流の家の事業に初めて参加する児童が 103 人（72.5%）と多く、「このような事業を交流の家で実施していることを知らなかったので、今後も同様の事業があれば参加させたい」という声があった。このことから、一人一人の手元に届く広報の重要性を改めて感じた。  
また、これまでは体験活動の機会に興味を示さなかった児童が、本事業のチラシを見て参加を決めたというエピソードもあり、対象者の興味を引く事業企画の工夫に加え、チラシの構成やデザインの技術についても、参加の意欲を引き出す媒体として、工夫を加えていく必要がある。

- 全道の施設で協力し企画・実行できたこと、多種多様な人材が一つの目標に向けて組織し運営したことを通して、スキルやノウハウなどの情報交流があり、関わった人材それぞれの体験活動のスキルアップにつながられたことも、大きな成果であった。



<事業の指標に関する達成度>

- (1) 参加者の満足度 97.9%
- (2) スタッフによる、参加者の変容のみとり数  
(具体的なエピソード数)
  - ・・・前述のスタッフのみとりのとおり

